

江戸楽

edo-gaku

池上
本門
合式

江戸自慢
三
六
典

歴史が息づく
まちづくり

名刹と自然が誘う

大田区

江戸を
画

彫多七

月刊「江戸楽」2026年10月号より



左より双盤念仏、洗足池、水止舞、明神湯

歴史が息づく まちづくり

——名刹と自然が誘う大田区

参考文献：池享・櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編「みる・よむ・あるく 東京の歴史6 地帯編3 品川区・大田区・目黒区・世田谷区」（吉川弘文館）、大田区教育委員会事務局大田図書館文化財担当「大田区歴史散策ガイドブック（池上・久が原編）」、新倉善之「大田区史跡散歩（東京史跡ガイド11）」（学生社）、西村敏康「リニューアル版 大田区ウォーキングガイド」（ハーツ & マインズ）、大田区史編さん室編「史誌第32号『馬込村の文士たち』」、大田区立郷土博物館編「特別展 作品の中の大田区—文士・画家の描いた風景—」、馬込文士村継承会「馬込文士村—馬込文士村誕生の背景」、野村裕「馬込文士村の作家たち」（馬込文士村を探ねる会）、大田区「大田区歴史的風致維持向上計画」

左より義民六人衆報恩感謝祭、池上本門寺宝塔、水神祭、大田区立郷土博物館



日本の空の玄関口・羽田空港を擁し、都市として発展を続ける大田区には、古代から現代まで様々な時代の記憶が刻まれている。大森貝塚に代表される古代の遺跡、池上本門寺をはじめとする歴史的な建造物、そして多くの文士や芸術家が暮らした馬込文士村など、まちを歩けば、時代を超えて受け継がれてきた多彩な歴史・文化が息づいていることを感じるだろう。

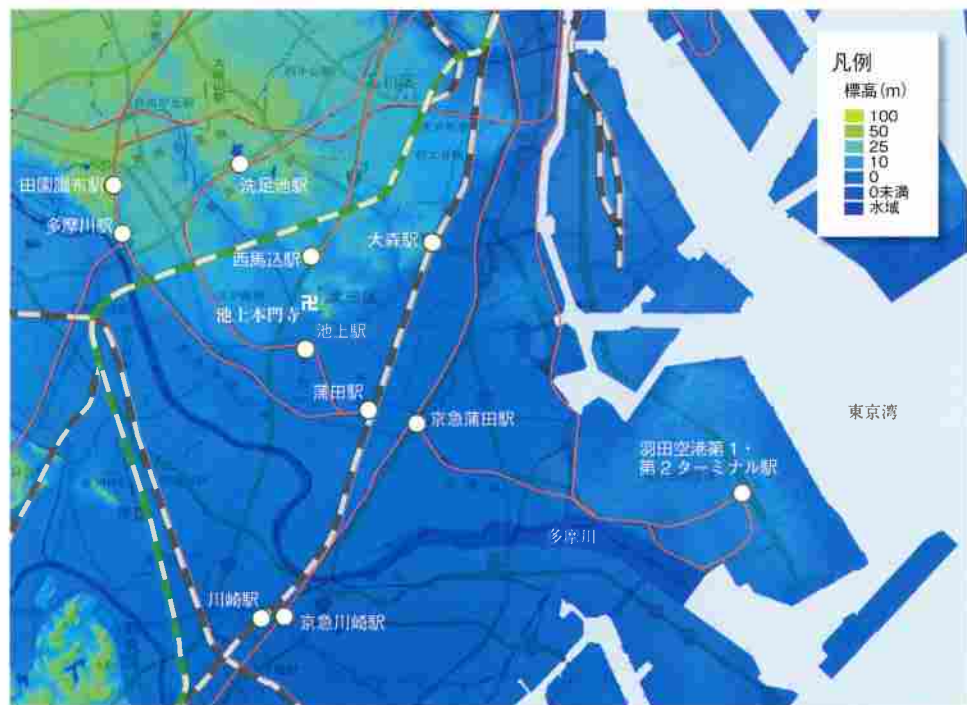
そうした大田区の歴史や伝統を生かしたまちづくりを進める「大田区歴史的風致維持向上計画」が、2026年5月、「歴史まちづくり法(※)」に基づく計画として東京都内で初めて国の認定を受けた。全国では102カ所となり、歴史的な建造物と、歴史と伝統を受け継ぐ人々の暮らしを未来へつなぐ、意義のある取り組みだ。

本誌では、これらの地域資源と、それを育み支えてきた自然環境や人々の営みに光を当て、「歴史的風致」という視点から、大田区ならではの魅力を紹介していきたい。

※2008年に施行された「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」（以下、「歴史まちづくり法」という）に基づく制度。歴史的風致の維持向上を図ろうとする市町村が策定する「歴史的風致維持向上計画」を、文部科学大臣、農林水産大臣、国土交通大臣が認定し、その取り組みを支援する

古墳から空港まで
海あり「山」あり

東京の縮図・大田区



出典：国土地理院ウェブサイト (https://www.gsi.go.jp/kankyochiri/degitalelevationmap_kanto.html)
「東京都」をもとに「江戸楽」編集部作成

東京の東南部に位置し、二三区で最大の面積を誇る大田区。古代から現代までの歴史と、それを育んだ地理的条件について、大田区教育委員会の田島太良さんに話を聞いた。

古代から続く人々の営み

大田区はしばしば「東京の縮図」と表現されます。東は東京湾、南は多摩川に面し、田園調布や洗足池周辺は武蔵野台地の高台で、起伏に富んだ地形となっています。地元で親しみを込めて「お山」と呼ばれる池上本門寺は、低地と台地の境にあたる段丘崖に位置し、石段を上るとまるで山を登るような感覚を味わえるでしょう。

文化や産業の面では、大田区はかつて大森村と蒲田村に分かれており、江戸の郊外として農

大田区立郷土博物館にて。後方は、都の無形民俗文化財に指定されている大森・厳正寺(ごんしょうじ)の水止舞(みずとめまい)についての展示。水止舞は、雨を求める雨乞い(道行)と降りすぎた大雨を止める水止め(水止舞)の2部構成となっている行事



大田区教育委員会事務局
文化財担当 学芸員
田島太良さん

村や漁村が広がる地域でした。江戸時代初期に開削された農業用水路「六郷用水」が流れ、近代に入ると高級住宅地、町工場が形成され、様々な暮らしと産業が育まれてきました。この多彩な表情こそが、大田区の特徴です。

歴史上の人物や伝統行事に触れる

けに知られるようになりまし。こうした地理的条件により、大田区では古代から続く人々の営みを見ることができます。

ことから、加藤清正、西郷隆盛、勝海舟など歴史に名を刻んだ人物の足跡も見ることができます。人やモノが行き交う交通・物流の要衝という点では、現在、東京の玄関口である羽田空港を擁することも挙げられます。

私も大田区の出身で、子どもの頃

縄文時代の前期は現在よりも海面が高かったため、今の内陸部もかつては海で、田園調布の近くでも貝塚が発見されています。有名な大森貝塚は明治十年(一八七七)、米国の動物学者・モース博士が、大森停車場(現JR大森駅)付近の段丘崖で貝殻の堆積を発見したことをきっかけ

東京湾と多摩川に面する大田区は、古くから外から訪れる人々を迎えたり、土地の威信を示したりする場所としての役割も担ってきました。多摩川を見下ろす丘陵の端に造られた「田園調布古墳群」や東海道の渡船場「六郷の渡し」などもその例ですね。名刹・池上本門寺がある



大正3年(1914)頃、池上本門寺の山上より門前を撮影した写真。参道に沿って塔頭寺院が建ち並んでいる

には大森貝塚の発見から一五〇年を迎えるなど、歴史を振り返る節目の年が続きます。ぜひ郷土博物館をはじめ区内各地を訪れ、大田区の歴史や文化に触れていただければと思います。

※本山などの大きな寺院の敷地内や周辺に建てられた独立寺院

大田区立郷土博物館

大田区南馬込 5-11-13
TEL 03-3777-1070
常設展は無料
開 9:00 ~ 17:00
休 月曜(休日・祝日は開館)、
年末年始、臨時休館日



上／大田区立郷土博物館の展示。都立田園調布高等学校内遺跡から出土した貝塚の地層を剥がして標本にしたもの(縄文時代前期) 下／JR大森駅徒歩3分に建つ「大森貝塚」の発掘記念碑

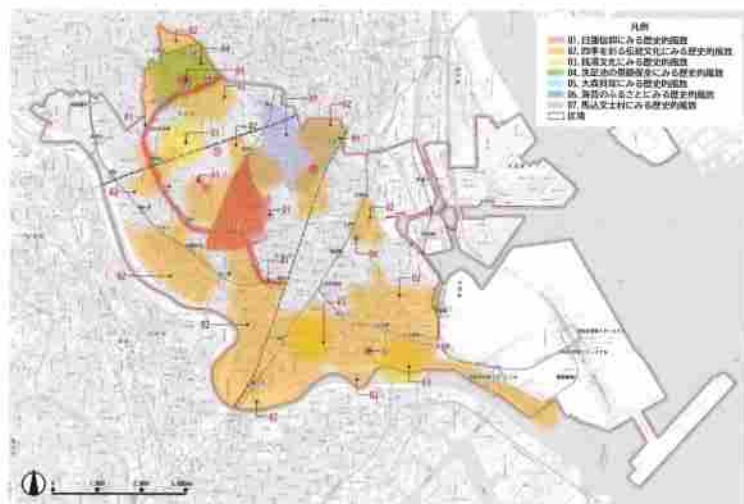


図2 7つの歴史的風致とその位置(大田区歴史的風致維持向上計画より)

「歴まち計画」が定義する 大田区の歴史的風致

- 1 日蓮信仰にみる歴史的風致
- 2 四季を彩る伝統文化にみる歴史的風致
- 3 銭湯文化にみる歴史的風致
- 4 洗足池の景観保全にみる歴史的風致
- 5 大森貝塚にみる歴史的風致
- 6 海苔のふるさとにみる歴史的風致
- 7 馬込文士村にみる歴史的風致



大田区の
銭湯情報



大田区歴史的
風致維持向上
計画の詳細



大田区の文化を発信 OMAISEN PROJECT

2026年は「歴まち計画」をはじめ、作家・宇野千代を主人公のモデルにした連続テレビ小説『ブラッサム』(NHK)の放送、大森駅開業150周年など、大田区ゆかりの歴史や人物に注目が集まっている。2027年には勝海舟が登場する大河ドラマ『逆賊の幕臣』(NHK)、区制80周年も控えており、こうした機運を地域の魅力発信につなげようと、大田区が進めるのが「OMAISEN PROJECT」だ。大森(O)、馬込(MA)、池上(I)、洗足池(SEN)の頭文字を組み合わせた名称で、各地域に息づく文化資源を掘り起こし、イベントなどを通じて発信していく。

馬込文士村を漫画で紹介するリーフレットを地域の小学生などに配布するほか、2026年11月には連続テレビ小説『ブラッサム』(NHK)のトークイベントも予定している。庁内の部局を横断し、大田区文化振興協会や大田観光協会等とも連携しながら、シビックプライドの醸成と地域ブランドの向上を目指す。



詳しくはこちら

いる取り組みの一つが、「馬込文士村魅力向上事業」(P22)。このほか、大田区独自の教科「おおたの未来づくり」などを通じ、小中学校で地域に根づいた民俗芸能に触れる機会を設けるなど、次世代への継承を進めていきたいと考えています。「歴まち計画」の基本理念は、

「歴史・文化をめぐり、訪れたくなる、ウォーカブルなまち」。ぜひまちを歩きながら、大田区の魅力を感じていただきたいですね。例を挙げると、今回定めた七つの「歴史的風致」(図2)の一つが「銭湯文化」。都内最多の銭湯と、太古の地層から湧き出る「黒湯」が特徴です。

歴史的には、農漁村や町工場で働く人々の暮らしや市街地の発展など、時代の変化とともに銭湯文化が育まれてきました。歴史に想いを馳せながらまちを歩き、最後は銭湯で汗を流す。例えばそんな楽しみ方で、大田区の魅力を五感で感じていただきたいと思っています。

大田区の 歴史的風致とは

大田区長 鈴木晶雅さん



認定証を掲げる鈴木区長

2026年5月、大田区の「歴史的風致維持向上計画」が、歴まちづくり法に基づく計画として都内で初めて国の認定を受けた。地域に息づく歴史や文化をまちづくりに生かし、その魅力を次代へつなぐ取り組みだ。その意義について、大田区長の鈴木晶雅さんに話を聞いた。



図1 「歴まち計画」が定義する「歴史的風致」

大田区には貴重な歴史・文化や、それらを支える地域の活動が今も息づいています。一方で、都市化や核家族化が進み、伝統行事の担い手不足など、歴史や文化を次代へ継承していく上での課題も生じています。こうした状況を踏まえ、歴史的建造物や祭り、行事などを守り、次世代へつないでいくために、二〇二六年三月に

「大田区歴史的風致維持向上計画」(以下、「歴まち計画」)を策定。五月に歴史まちづくり法に基づく計画として国の認定を受けました。全国の市区町村一七四一のうち、認定都市はこれで一〇二カ所となります。「歴まち計画」の大きな特徴は、都市計画・観光・産業・教育・文化・防災など担当部署の垣根を越えて取り組むとともに、地域の皆さんの活動とも連携しながら、総合的に施策を進めていく点にあります。今回、都内初となる認定を受けたことは、大田区の歴史・文化の魅力を区内外に広く発信し、区民の皆様が地域への誇り、シビックプライドを一層高めていくきっかけにもなると思っています。「歴まち計画」では、歴史的建造物の改修や参道の無電柱化工事などのハード面の整備に加え、祭りや伝統行事を未来へ継承していくための環境整備や地域活動の育成・支援といったソフト面の施策にも取り組んでいきます。すでに動き始めて

池上本門寺と門前町

ここからは、「歴史的風致維持向上計画」で「維持及び向上すべき歴史的風致」として認定された七つ（前頁参照）のうち、「日蓮信仰」「洗足池の景観保全」「馬込文士村」の三つを紹介する。まずは都内でも有数の名刹として知られる「池上本門寺」を訪ねた。



五重塔。初層が和様、2層以上を唐様とする折衷様式で、高さ約31m

日蓮信仰と地域の絆

参道から石段を上り人々が憩う境内へ

東急池上線「池上」駅から「池上本門寺通り商店会」を歩く。名物の久寿餅屋や煎餅店、仏具店などが軒を連ねるこの商店街は、池上本門寺の総門へと続く参道でもある。歩くこと約十分。「南無妙法蓮華経」と刻まれた、文化八年（一一八二）建立の大きな題目塔を左手に、呑川に架かる霊山橋を

渡ると、両脇には塔頭寺院が並ぶ。その先に見えてくるのが総門だ。総門をくぐると、目の前に急

な石段が現れる。慶長年間（一五九六〜一六一五）に熊本藩初代藩主・加藤清正が寄進したものと伝えられ、その数は九六段。法華経の第十一章に記された詩句「宝塔偈」が九六文字であることに由来するという。石段を上り下りしながら体力づくりにも励む人々を横目に、息を



大堂内の木造日蓮聖人坐像は鎌倉時代の作で、国指定重要文化財。等身大で、右手に持つ仏子（ぼっす）には日蓮の母の髪が入っているとされる。「空襲時には担いで運び出したと伝えられています」と安藤さん

日蓮入滅の地に寺院として整備

池上本門寺は弘安五年（一一八二）、日蓮が六一歳で亡くなった地に建つ寺院だ。日蓮は鎌倉仏教のひとつである日蓮宗の宗祖で、誰もが平等に成仏できるという法華経の教えを重んじ、「南無妙法蓮華経」と唱えることで民衆を救済しようとした僧侶。鎌倉幕府や他宗派を鋭く批判したことで権力者や有力寺院から迫害されるが、生涯をかけて信義を貫き通したその生き方と教えは今もなお人々の心を捉え、篤い信仰を集めている。

正面には大きな「大堂」（祖師堂ともいう）。左手には霊宝殿。こちらでは寺宝や文化財を収蔵・展示しており、学芸員の安藤昌就さんが担当している。「歴史的風致維持向上計画の認定に際しては、歴史上価値の高い建造物を有することが必須条件。大田区で重要文化財の建造物を有しているのは当山のみです」と、安藤さんは語る。

弘安五年、日蓮は病氣療養のため住み慣れた身延山（現在の山梨県）を下り、常陸国（現在の



池上本門寺執事・山村栄慎さん（右）、霊宝殿学芸員・安藤昌就さん（左）。後方は大堂（祖師堂）



多宝塔が建つのは日蓮を茶毘に付した場所。高さ 17.5 m

茨城県)の温泉を目指して旅立った。しかし、その途上、池上の郷主・池上宗仲の館(現在の池上本門寺。池上本門寺に隣接)で亡くなる。宗仲は鎌倉幕府に仕える武士で、建築の技術をする作事奉行と伝わる。日蓮に

奥庭「松清園」(通常非公開)を作庭したのは大名・作庭家・茶人など多彩な顔で知られる小堀遠州と伝わる。戊辰戦争時、新政府軍の本陣が池上本門寺に置かれたことから、西郷隆盛と勝海舟による江戸無血開城に関する話し合いがこの庭園で行われたとされる

深く帰依する信者で、日蓮の没後、屋敷地を寄進。その後、日蓮の弟子・日朗を中心に、邸内にあったお堂を寺院として整備したのが、池上本門寺の始まりとされている。「お堂や境内を大規模に整備し、門前町が広がるのは江戸時代になってから。品川から中原街道(江戸―平塚を結ぶ脇街道)へと抜ける「池上道」が主な参道となっていて、『江戸名所図会』や浮世絵などを見ると、参拝者相手の茶屋が並んで賑わっている様子が描かれていますね」と安藤さんは話す。

有力者も厚く庇護 加藤清正の逸話

池上本門寺は近世、紀州徳川家、熊本細川家、鳥取の池田家など多くの大名から篤い信仰を集めた。なかでも加藤清正は熱心な日蓮宗の信者として知られる。江戸城の修築を命じられて三ヶ月ほど江戸に滞在した際には池上本門寺を参詣し、父母の墓を建立して供養した。加藤家が改易される際、清正の息子・加藤忠広(ただひろ)が自ら謹慎した場所も、ここ池上本門寺だ。

徳川家康もまた、池上本門寺と

縁が深い。安藤さんによれば、「家康は熱心な浄土宗の信者でしたが、三河一向一揆(※)などで苦勞した経験から、他宗派にも寛容な姿勢を取っていました。一方、家康の側室・お万の方は非常に篤



現在の総門と石段。手前は雲山橋



江戸時代の御会式の様子が描かれた「江戸自慢三十六興 池上本門寺会式」。歌川広重(2代)と歌川豊国(3代)の合作

い日蓮宗の信者で、境内にはその墓も残っています」という。

戦災を免れた 貴重な建造物

太平洋戦争ではほとんどのお堂が焼失するが、旧来の敷地はほぼ残っている。明治以来、境内を宅地や商業地などへ分譲した寺院も多かったなか、東京近郊で旧来の敷地をそのまま維持しているお寺は珍しいという。

焼失を免れた建造物のなかでも、特に希少性が高いのが国の重要文化財に指定されている五

重塔と多宝塔だ。「慶長十三年(二六〇八)に、二代将軍・徳川秀忠の寄進によって建立された五重塔は、関東最古のものです。明治以前に建てられた五重塔は、全国でも二基しか現存していないと聞きます。多宝塔は天保元年(一八三〇)建立。通常、多宝塔には『裳階』と呼ばれる屋根の下にもう一重の屋根を設けますが、こちらは本来の姿(宝塔型式)で造られており、屋外に建つ木造の宝塔形式としては全国唯一のものです」と安藤さんは話す。

人々の想いが重なる 十月の御会式

池上本門寺の行事の中でも、地域の人々や信者の思いが一つになって受け継がれているものとして特筆すべきなのが「御会式」である。日蓮の命日に営まれる法要で、鎌倉時代から続く伝統行事だ。毎年十月十一日から十三日にかけて行われ、なかでも「万灯練供養」は最大の見どころ。毎年、全国から三〇万人

上/現在の万灯練供養の様子
下/昭和7年(1932)頃の万灯練供養

池上

立ち寄り
スポット

実相寺



上／池上本門寺の塔頭寺院の一つ。「寺は文化の発信源」を基調にコンサートなども行っている 左／OMAMOは実相寺での授与の他、インターネットで受付・発送も行う

寺町・池上から届ける 世界で一つのお守り

実相寺では一人ひとりの祈りに合わせたお守り「OMAMO」を授与している。例えば長寿を願う亀甲文様など、祈りの内容を元に実相寺が柄を選んで祈祷を行った、自分だけのお守りだ(色は配色リストから選択可能)。副住職の酒井智康さんは「お守りは神仏との約束の証し。手元に置くことで、自分を振り返ったり行動に移したりするきっかけになればいいですね」と話す。

大田区池上 2-10-17 TEL 03-3751-4056

池上池田屋

右上 池田屋の「久寿餅」。1人前 500 円、2～3 人前 950 円など各種揃う 下 指田さんは池上小学の卒業生。小学生の「町探検」の授業にも協力する 右下 老舗の風格が漂う店舗



門前町の老舗 池上名物の久寿餅

元禄時代に創業。保存料や防腐剤を使用しない昔ながらの作り方で、もちもちして程よい弾力が特徴。手土産としてはもちろん、全国発送も。店内の喫茶コーナーでは久寿餅やあんみつなどの甘味をいただける。「池上は門前町ですが観光地のような喧騒が無く、この落ち着いた雰囲気が好きです」と 18 代目の指田幸司さんは話す。

大田区池上 4-24-1 TEL 03-3751-0154
営 9:00～18:00 (喫茶は 10:00～17:00、LO16:30)
休 なし(不定休)

地域の人の憩いの場 体にやさしい食事を

池上本門寺の塔頭寺院のひとつ「養源寺」隣の食堂。店主の菊池由佳里さんは出産をきっかけに野菜をふんだんに使ったバランスのよい食事、そして消化を助ける麴の力にも魅せられて店を開いた。「おばあちゃんちのように気軽に、『明日も来るね』と言ってもらえるような店にしたいですね」と菊池さん。

大田区池上 1-31-1 TEL 070-9027-0891
営 モーニング 9:00～11:00、ランチ 11:00～14:00、
総菜販売 15:00～19:00

うーたん
麴食堂

4 種のおかず、メインディッシュ (2 品) とごはん、
ミニデザート、塩麴スープのセット(1,600 円)



を超える人々が訪れ、池上の街は熱気に包まれる。
団扇太鼓や笛の音に合わせ、約三千人もの人々により、桜花の造花で彩られた万灯が百基以上、参道や周辺の道路を練り歩く。太鼓や鉦の音、題目を唱える声が夜遅くまで響き、万灯の明かりが池上本門寺へと進んでいく。「御会式が近くなると、太鼓や鉦を叩く練習の音があちこちから聞こえてきて、地域の風物詩の一つになっています」と山村さん。

地域との結びつきは、鉄道の歴史にも見ることができる。東急池上線の前身である池上電気鉄道は、池上本門寺への参詣客を運ぶことを目的の一つとして大正十一年(一九二二)に開業した。開業日も御会式に合わせられたという。そのつながりは現在にも受け継がれており、御会式が近づくと池上線沿線の各駅にポスターが掲出され、東急池上線・多摩川線蒲田駅のホームにはミニチュアの万灯が飾られる。さらに万灯練供養が行われる日には、池上線が増発した臨時ダイヤで運行されるなど、長い歴史の中で受け継がれてきた信仰と地域のつながりが感じられるだろう。



大正 6 年(1917) 以前に撮影された御会式で賑わう総門前(大田区立郷土博物館所蔵)

池上本門寺

東京都大田区池上 1-1-1 TEL 03-3752-2331



門前町の一角。右手は江戸時代創業で、もとは茶屋だった萬屋酒店。左は久寿餅の老舗・池上池田屋。その間の道が「池上道」。池上には江戸時代をルーツとする久寿餅の老舗が今も数軒残っている

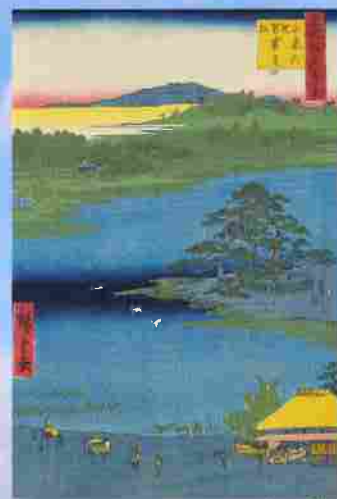


自然と歴史に 触れる洗足池

江戸時代から人々を魅了し続けるこの風景が
残されてきたのはなぜなのか。ここからは、
歴史的風致地区の一つ、洗足池地区の歴史と
魅力を見つめてみよう。

五反田駅から蒲田駅までを結ぶ、全長十・九km、全十五駅を三両編成のコンパクトな車両が走る。その中間にある「洗足池」駅を降り立つと、そこには東京とは思えないほどの広い空。正面には「洗足池ボートハウス」があり、まるで避暑地の池畔を訪れたような清々しい景色が広がる。この洗足池は、日蓮が池畔で手足を洗ったという伝承から名づけられたといわれている。江戸時代から景勝地として知られるようになり、初代歌川広重や川瀬巴水（P.20）もこの地を描いた。そして勝海舟もこの地に惹かれ、別荘を建て、池畔に建つ墓所に眠っている。

今なお変わらぬ風光明媚なこの地が存在し続けるのは、この地を愛する人々の思いが脈々と受け継がれ、進化を遂げてきたからだだった。



広重「名所江戸百景 千束の池袋松」(国立国会図書館)

勝海舟が愛した洗足池

洗足池のほとりには「勝海舟記念館」そして、「勝海舟夫妻の墓」がある。勝海舟はなぜこの地を選んだのか。その理由を探ってみよう。

上／勝海舟記念館 館長 五ノ井巖暢さん(右)と学芸員 星川礼応さん(左)
下／「勝海舟夫妻の墓」(大田区南千束 2-14-5 洗足池公園内)。勝海舟が生前に描いた墓石図をもとに、明治32年(1899)に完成した



江戸の原風景を求めて

江戸無血開城がなされた慶応四年(一八六八)四月十一日。その直前、九日と十日に勝海舟は新政府軍の本陣が置かれていた池上本門寺に向かった。その途上、洗足池辺りで危難に巻き込まれ身を隠していたところを、地元の人に助けられ池上本門寺まで連れて行ってもらったと伝わる。後年再びこの地を訪れ、明治二五年(一八九二)に別荘である「洗足軒」を建てた。海舟はなぜ人生終盤の地として、この地を選んだのか。「勝海舟記念館」の学芸員・星川礼応さんは次のように語る。「勝が記した『洗足軒之記并歌』という史料に勝の意図が記されています。日蓮聖



現在の大森第六中学校の敷地内に建っていた「洗足軒」。高台にあり、ここから洗足池や富士山も見渡すことができたという(提供：大田区立勝海舟記念館)

人の『足を洗う』という故事を思い起こし、自分と重ね合わせ、俗世界から離れて過ごしたいという思いから、この地に茅葺の農家風建築である『洗足軒』を建てました。勝は当時政権の中枢から退き、外から政府の動向を見守ることに徹していました。さらに、ともに江戸無血開城に奔走した大久保一翁や山岡鉄舟などが先立ち、自分は取り残されてしまったという思いもあったようです。勝は散歩をしたり、旧幕臣の仲間を呼んで詩や和歌を詠んだりして、自由な時間を送った。

生前にこの地に眠ることを決めていたのは、この地の在来の風景、江戸の風景が残る洗足池に惹かれていたのかもしれない。「勝は明治十六年には理想の墓の絵を描いています。草が生い茂る中にある質素な五輪塔の姿はまさに今の勝海舟の墓石そのもの。勝が描いた理想像が実際の墓所に反映されています」

洗足軒は戦後まもなく火災により焼失。現在は旧清明文庫(国登録有形文化財)を「勝海舟記念館」として活用し、勝海舟の功績や大田区とのゆかりを伝えている。館長の五ノ井巖暢さん



大田区立勝海舟記念館
大田区南千束 2-3-1
TEL 03-6425-7608
料 一般 300 円、小中学生 100 円、
高齢者(65 歳以上 240 円)
開 10:00 ~ 18:00
(入館は閉館 30 分前まで)
休 月曜(休日・祝日は開館)、
年末年始、臨時休館日

人々が集った洗足池

今なお、水辺と緑が調和した美しい自然景観を維持する洗足池。その環境保全活動の中心を担う「洗足風致協会」を訪ねた。

まちの発展とともにある 洗足池公園

洗足池の代名詞でもあるボートの運営や洗足池公園の環境保全活動の中心的役割を担っているのが「洗足風致協会」である。



右：昭和2年に開園したチンカラ園の滑り台などの遊具。現在の桜広場の場所にあり、芝居小屋や水遊び用の池などもあった(提供：洗足風致協会) 左：1995年に洗足池西岸に三連太鼓橋(池月橋)が竣工したのを記念して始められた催し「春宵の響」

その歴史は約百年前に遡る。大正時代に入り都市の人口は増加、周辺町村にも多くの人々が住むようになり開発を計画的に進める必要が生じた。そこで大正八年(一九一九)に制定されたのが都市計画法(旧法)だ。同法が定める「風致地区」として、都市化による開発を制限し、自然を維持する地区が指定され、東京では、洗足・善福寺・石神井など十地区が制定された。そして風致地区の運営に地域住民の協力を得るために各地に作られたのが風致協会だった。

「洗足風致協会」は昭和八年(一九三三)に地元の名士十人によって設立。すでに六年前には洗足池ボート場が運営開始され、「チンカラ園」という日本最古の有料遊園地が開園していた。風致協会の初期の事業計画は、各種遊技場や野球場、プール、児童遊園地など。それらは実現することとはなかったが、当時の設備を拡充し、多くの人を洗足池に呼び込むことを目的にしていたことがわかる。「人が来なければまちは発展しない」という思いが設立時からあったのだと思います。守るものと開発のバランス感覚に長けていた。まちが発展する中で洗足池がどうあるべきか、どう活かされていくべきかを時代に合わせて考えてきたのだと思います」と会員の一人は話す。

協会では蜚が息できる自然環境を環境指標の一つの軸として、大森第六中学校や大田区などと共に二〇一〇年より「はたの復活プロジェクト」に取り組み、水質改善や景観向上に努めてきた。また、「洗足池はたの夕べ」や野外邦楽コンサート「春宵の響」といったイベントを開催し、地域の風致意識を高めることにも力を注ぐ。各地に設立された風致協会の中で、現在も活動を続けているのは洗足のみ。三〇名を超える協会員の中には、設立時のメンバーの孫やひ孫など、三代四代にわたって活動が続ける人も多い。「洗足池公園は、洗足池を中心に自然発生的に生まれた人の輪が育ててくれた公園であり、その延長線上に今があります。これからも人々が集い、育てる公園であり続けたいと思っています」

幼少の頃からずっと親しんできた公園です。子ども達が集う姿を見るのが嬉しいですね。これからは水質改善などに取り組み、多くの人に愛され続ける公園であればと思っています。

会長
森井郁夫さん



池の周囲1.2kmが園路として整備され、20分ほどで一周することができる。水生植物園など現在も洗足風致協会による整備が進められている

洗足池

立ち寄り
スポット



洗足池
MAP

日本酒処 shu



「新しい日本酒にも気軽に挑戦してほしい」との思いから、一杯60mlの日本酒3種とおつまみ2種を楽しめる「ちょい飲みセット」(1,800円)が人気

日本酒との 新たな出会いを提供

こども食堂や学習塾を運営している北山秀人さんが、「知る人ぞ知る日本酒を紹介する」をコンセプトに2023年にオープン。日本酒学の講師を務める北山さんや調酒師の資格を持つ女将が全国の酒蔵から、東京では希少な日本酒を仕入れている。新しい酒にチャレンジしやすいよう、どの銘柄も同じ価格で提供。銘酒との新しい出会いを楽しんでみては。

大田区上池台 1-17-1 TEL 080-9322-9019
営 17:30 ~ 22:30 (22:30 ~ 25:00 はカラオケバーとして営業)
休 日曜 ※臨時休業の場合あり。HP 等で確認を

wagashi asobi



©MIHO



大田区のふるさと納税の返礼品にも選ばれている「ドライフルーツの羊羹」(2,500円)。他に「ハーブのらくがん」(500円)、「かならずや勝最中」(6個入・2,000円)を販売

地元の自慢の 手土産を目指して

「受け継がれる技術を活かし、現代の人々が喜ぶ和菓子を」との思いで、長年老舗和菓子店で職人として活躍してきた浅野理生さんと稲葉基大さんが2011年に開店。多店舗化やオンライン販売はせず、店舗のみで販売している。「地元である地域の皆さんに可愛がっていただき、皆さんの自慢の手土産になればと思っています」と稲葉さんは微笑む。

大田区上池台 1-16-2 TEL 03-3748-3539
営 10:00 ~ 17:00 休 日曜

馬込文士村

大正12年(1923)の関東大震災以前から昭和初頭にかけて、小説家、詩人、画家などの文士達が集った「馬込文士村」。彼らは創作活動に取り組む一方、ダンスに興じ、酒を嗜み、文学談義に花を咲かせ、若さに溢れ、笑いに満ちた日々を過ごした。なぜこの村に文士達は集ったのか。大田区立郷土博物館の築地貴久さんに話を伺った。



萩原朔太郎撮影「昭和初期 馬込風景Ⅱ」(提供: 水と緑と詩のまち前橋文学館)

ありのままの
自然が残る馬込へ

牧歌的な風景に魅せられ
集った文士達

のちに「馬込文士村」と呼ばれるようになるコミュニティがあったのは、現在の大田区の馬込・山王・中央などの大森駅西側の地域一帯。多くの文士が馬込村とその周辺に集った理由は、関東大震災による被害が少なかったことに加え、東京市(現在の千代田区や中央区、港区など)郊外の宅地化が進み、田園風景が失われていったことが大きい。自然豊かな環境に身を置いて作品制作に没頭しようと、文芸活動の拠点として文士達が当時、農村的景観を維持していた馬込村とその周辺に居を移していく。小説家の尾崎士郎・宇野千代と

その仲間達や、画家の小林古径・川端龍子、歌人・翻訳家の片山廣子や詩人の日夏耿之介らのグループなど、様々な職業の人々が多く大正・昭和初期に馬込村とその周辺に集うという偶然も重なった。

文士達は村のどのような点を気に入り、定住したのだろうか。



左/小説家の尾崎士郎が亡くなるまでの10年間を過ごした家を復元した「尾崎士郎記念館」。複製原稿や著書、愛用品なども展示 右/真野紀太郎「馬込風景」大正9年(1920)、当時の自然豊かな様子が描かれている(提供: 大田区立郷土博物館)

築地さんは次のように話す。「都市化が進む中でサラリーマン層が誕生した東京市と比べて、馬込村には農村地帯の雰囲気が残っていました。農家の人達はサラリーマンのように定期的に賃金をもらうわけではなく、自由業である文士達と似たような職業環境だったことから、彼らも過ごしやすかったのでしょう。夜中まで作品制作に没頭するので、夜も電気がついており、当時電灯が少ない時代ゆえに防犯にもなると、地域の人達から感謝されていたそうですよ」

村に集った文士には、大正10年に文壇に登場したばかりの宇野や尾崎のように、デビューして間もない者やデビュー前の者なども多かった。村では、食べるのにも困るような生活を送っていた文士達だったが、若さもあったのだろうか、文士村内には笑いに満ちた明るい世界が広がっていたという。駆け出しの

国の登録有形文化財にもなっている「龍子記念館」。龍子の文化勲章受章と喜寿を記念し、昭和37年(1962)に建設された。龍子自身が美術館の構想を行った(提供: 大田区立龍子記念館)



馬込文士村のことを知っていくと、文士達のちょっと笑えるエピソードも多くて面白いですよ。ぜひ、興味を持っていただくと嬉しいです。



大田区立郷土博物館 学芸員 築地貴久さん

環七道路にかかる新馬込橋。平成26年(2014)に架け替え工事が終了し、版画絵師・川瀬巴水の代表作の12枚が陶板として飾られている

文士だった彼らが後に大物作家へと成長していくにつれて、「馬込文士村」の存在は文学界でも知られるように。

「馬込文士村」という呼称が後に定着することになる契機としては、当時村で暮らした作家の榊山潤が、村での出来事を描いた『馬込文士村』を昭和四五年(一九七〇)に発刊したことが挙げられる。そして、四歳の頃に文士達と同時期にたまたま馬込地域に移り住み、大田区の中学校校長も務めた野村裕さん(P21)の尽力により、文士達の居住地が人々に知られることとなった。

馬込文士村に集った文士達

かつて八〇人もの小説家や詩人、画家が居を構え活動していた馬込文士村。村に集った文士達を紹介しよう。



尾崎士郎
1898～1964

提供：大田区立郷土博物館

窓から見えるすべての情景が、私の心に、あまりにしつくり調和し過ぎていた。こんな景色によって彩られた田園が世界の何処にあるだろうか、

『窓にうつる風景』
(初出 中央公論、大正 14 年
『尾崎士郎全集』第六巻、講談社)



萩原朔太郎
1886～1942

提供：水と緑と詩のまち
前橋文学館

詩人。特に村の自然や坂を愛しており、作品の中でも「實に自然の明るい所」などと馬込村に触れている。散文詩「坂」は、馬込の白田坂をモデルにしたとされる。

馬込村といふ所は、實に自然の明るい所だ。私は東京の郊外に、こんな明るい世界があるとは思はなかつた。樹木の色も、田畠の色も、まるで他所とはちがつてゐる。(中略) 自然の中に生命があり、力があり、生活があるといふことを、私は馬込村に来て始めて学んだ。

『移住日記』/『都新聞』昭和2年6月
(『萩原朔太郎全集』第八巻、筑摩書房)



川端龍子
1885～1966

提供：大田区立龍子記念館

日本画家。近代日本画の巨匠と称され、ダイナミックな日本画を数多く制作した。唯一の趣味が建築で、馬込に自邸やアトリエを新築し「御形荘」と名付けた。龍子記念館(P19)の向かいの龍子公園には、旧宅とアトリエが保存されている。



昭和7年頃、左から今井達夫、尾崎士郎、中村武羅夫(むらお)、山本周五郎、鈴木彦次郎。当時、村居住の文士達により大森相模協成が結成された(提供：大田区立郷土博物館)



宇野千代
1897～1996

出典：国立国会図書館
「近代日本人の肖像」
(https://www.ndl.go.jp/portrait/)

小説家。三人目の夫、尾崎と馬込に住む。代表作は『色ざんげ』『おはん』など。馬込時代のことを「あの頃の自分は、小説家と言ふよりも、自分の恋愛のことに気をとられて忙しかつてゐたので、とても評判が悪かつた」(※)と振り返っている。二〇二六年度後期の連続テレビ小説「ブラッサム」(NHK)のヒロインのモデルに。

熊谷恒子

現代女流かな書道家。美智子上皇后に進講したことで知られる。生前に住んでいた自宅は改装され、南馬込に「熊谷恒子記念館」として開館。

室生犀星

詩人・小説家。友人・芥川龍之介の自殺にショックを受け、親しかった萩原朔太郎の妻に誘われ、田端文士村から馬込文士村にきた。後に馬込に自宅を建て、終の棲家としている。

川瀬巴水

版画絵師。25才の時、錦木清方の勧めで洋画の基礎を学ぶ。大正7年に伊東深水の作品を見て木版画に興味を持つ。大田区域内の風景も多数描く。

村岡花子

翻訳家・童話作家・評論家。翻訳作品『赤毛のアン』が有名。連続テレビ小説「花子とアン」(NHK)でもその半生が描かれた。

地域の誇れる文化 その歴史・魅力を後世へ

村の存在を世間に広めた第一人者が野村裕さんだ。娘の薄根幸さんは「父は四歳の頃、祖父の仕事の関係で大阪から馬込へ移り住みました。祖父と散歩をしていた際に、同じく散歩中の作家・室生犀星と邂逅。会釈して通り過ぎた後に、祖父から『あの人が小説家の室生犀星だよ』と説明されたこと

をはつきりと覚えていると、よく話していました。幼少期、常に文士の存在が近くにあったという環境が、後の『馬込に住む人々に、馬込文士村の存在を知ってもらい、地域に対する誇りや愛情を持つてほしい』という願いにつながったのではないのでしょうか」と語る。

教師となった野村さんは、静岡県の中学校に勤めた後、大田区の中学校に移り、馬込の自宅に戻る。その頃から、休日のほとんどを割いて、文士達の旧居の住所を調べ、現在の地番に表すなどの調査に取り組むように。三〇年以上の調査の末、昭和五九年(一九八四)に探訪の成果や文士の作品の概要をまとめた『馬込文士村の作家たち』を自費出版するも、翌年、六六歳で他界。しかし、野村さんの熱い想いは受け継がれ、平成三年(一九九一)には産経新聞で馬込文士村をテーマとした連載が始まるなど、村の存在はさらに世に知られていく。平成十二年(二〇一〇)に

は、地域の活性化やまちづくりにもつなげたいとの思いから、有志数名により「馬込文士村継承会」が結成された。現在まで、村に関する講演会や展示会などを二〇〇回以上行っている。「志半ばで急逝した父。当時、大田区広報課にて区史の編纂を担当していた私は、失われつつある文士達の記録を今残さなければという想いで『馬込文士村特集』を提案し、平成二年(一九九〇)に史誌32号『馬込村の文士たち』を刊行しました。反響も大きく、間もなく完売。これが当時の私にできた、父の想いを未来につなげる精一杯の仕事だったと思っています。そして、陰ながら応援していた継承会やガイドの会からお誘いいただき、今年度から参加するようになりました。文学に明るくない方でも、私達の活動を通して、村の歴史や文士達のことを知り、地域を誇りに思ったり、作品を読んでみよう、と思ったりしていただけたら、嬉しいですね」



上/ガイドは二人体制で、川瀬巴水、川端龍子などの「芸術家コース」、宇野千代、村岡花子などの「女流作家コース」、お花見しながら散歩できる「桜コース」など、様々なコースがある。下/1期生の菊池真子(右)と2期生の江川麻美(左)。「今後は秋に『宇野千代が暮らした馬込文士村を歩こう』なども予定していますよ」と江川さん

馬込文士村継承会



上/JR大森駅西口から天祖神社に向かう階段の壁面にある、馬込文士村の住人のレリーフ。この他、住居跡の看板や案内板などの設置を区に提言したのも野村さんだ。左/薄根幸さん

村の存在を世間に広めた第一人者が野村裕さんだ。娘の薄根幸さんは「父は四歳の頃、祖父の仕事の関係で大阪から馬込へ移り住みました。祖父と散歩をしていた際に、同じく散歩中の作家・室生犀星と邂逅。会釈して通り過ぎた後に、祖父から『あの人が小説家の室生犀星だよ』と説明されたこと

をはつきりと覚えていると、よく話していました。幼少期、常に文士の存在が近くにあったという環境が、後の『馬込に住む人々に、馬込文士村の存在を知ってもらい、地域に対する誇りや愛情を持つてほしい』という願いにつながったのではないのでしょうか」と語る。

馬込文士村継承会事務局 大田区南馬込3-16-15 TEL 03-3771-4846

馬込文士村ガイドの会

実際に見て、歩いて感じる 馬込に残る、文士の足跡

平成十七年(二〇〇五)に、文士村の歴史や魅力を、街を歩きながら伝える「馬込文士村ガイドの会」が発足。「文士の作品や、村でどう過ごしたかなどの基本的な情報に加え、詩が好きな方なら室生犀星の話をしたり、文学に明るくない方には尾崎・宇野夫妻のエピソードから話したり、柔軟に、誰もが楽しめるガイドを意識しています。ガイドの中には、『檸檬』の梶井基次郎を研究している方をはじめ、様々なメンバーが集まっていますよ」とガイドの菊池真子さんは話す。

(ガイド申し込み) magomemura@yahoo.co.jp



歴史まちづくり計画、 東京一番乗り。

東京都内初認定

「歴史的風致維持向上計画」とは、
歴史・文化によるまちづくりの取り組み。
大田区の「歴史的風致維持向上計画」は、
東京都内で初めて国の認定を受けました。



江戸時代からの景勝地



文士たちが暮らしたまち



受け継がれる伝統文化



海苔栽培・流通の一大拠点



日蓮聖人ゆかりの海上本門寺



日本考古学発祥の地

